

フットボール  
にっぽん

LOVE

## CLUB PROFILE

[創立] 1918年

[所在地] 東京都文京区本郷7-3-1

## 第20回 東京大学ア式蹴球部

## ハンデいを情熱に

「東大」と言えば、何を思い浮かべるだろうか。

秀才、エリート……

毎年、多くの優秀な頭脳が集うことに異論はないだろう。

その日本最難関の試験を乗り越えた後も、サッカーへと時間と情熱を捧げる選手たちがいる。アソシエーション式フットボールを略した名が示す古豪で、今日も選手たちはさらなる成長を目指す。

取材・文●杉山孝一 本誌 写真●小塩裕

## サッカーを渴望する心

最近ではメディアも使用を誤る「最難関府」という言葉。本来は「大学」というカタゴリーそのものを指すが、よく「誤用」されるのが東京大学の枕詞となる場合。だが、その入学試験の突破が日本最難関であることに異論を唱える人は多くはないだろう。

その秀才集団は、スポーツでも優秀な成績を残している。男子ラグロス部は2005年に関東大学リーグを制覇、全日本選手権でも準優勝した。野球部はプロ選手を輩出。アメリカンフットボール部も関東1部リーグで戦い、ここ十数年では関東制覇を視野に入れた時期もあった。いずれも戦術が大きなウエイトを占める競技なだけに、サッカーでもと思いたくなるが、「よく言われませうけど、そんなことないですよ」と話すのは、小林誠OBコーチだ。

東大は、日本サッカーの黎明期を支えて

きた。かつては日本代表選手も輩出。選手監督として日本代表で戦い、日本協会会長も務めた岡野俊一郎氏もOBの一人だ。関東大学リーグでは9回の優勝を誇り、1926（大正15）年から31（昭和6）年まで関東大学リーグで飾った6連覇は、今も破られていない。だが48（昭和23）年の優勝を最後に順位を落とし、57（昭和32）年には関東2部に降格。69（昭和44）年には2部で優勝したが、入れ替え戦に敗れて1部復帰はならず。78年（昭和53）年に10年間維持した関東2部から東京都リーグに降格して以降、関東復帰の夢を果たしていない。

関東リーグで優秀な成績を誇っていた時代を知るOBには、都リーグを戦う現状に満足しない声も少なくないという。だがそれは東大が低下したというよりも、競技人口の拡大やプロリーグ誕生によりサッカーへの注目度が高くなったことに伴う、他大学のレベルアップの影響が大きいらう。現在、現場で指導に当たる鈴木久雄コーチは「最近では都リーグ1、2部でもスポーツ推薦の選手がいますから」と現状を語る。そういつた周囲の状況の変化とともに、東大がハンデいを背負っているのも事実だ。東大生が日本最難関の狭き「赤門」を潜り抜けるために、払う犠牲は小さくない。ア式蹴球部員も、高校時代に全国高校選手権予選までプレーを続けた者は少ないという。スポーツに汗を流したい時間も勉強に多く割いたからこそ、東大への入学がなかった。現役合格者でも高校3年生の春で引退となると、実質1年間はサッカーから離れることになる。年によって差はあるというが、現役と半々の割合だという浪人にいたっては、それ以上に選手として伸び盛りの時間を勉強に費やすことになる。

だが、そのハンデいが東大ア式蹴球部の強みでもある。小林コーチは「サークルに流れていく経験者も多いです。やり切った感がある人の方が、サークルに行くかもしれません」と語る。逆に「ア式蹴球部には、高校までにやり切れていない選手が多い。ケガとか勉強とか（サッカーに打ち込めない環境があつて、そういう思いがあるのかもしれない）。（入学までに）犠牲にするものも大きいですし」と話す。伊藤寛寛主将は「学生の内しか、一つ真剣に何かをできることはないと思いました。

東京都文京区  
東大ア式蹴球部



▲安保闘争でも有名な安田講堂が見守る御殿下グラウンド。歴史ある地で、部員たちは汗を流している



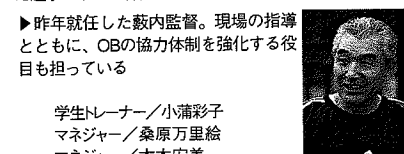
▲帝京大との練習試合、気持ちの見えるプレーを続けていた



▲「まだやり切っていない」という選手たち。真剣にサッカーに打ち込める時間と環境を大きな喜びとともに受け止めている



▲練習試合前の円陣で手をつなぐ。高い意識を持った選手たちは、仲間とともに高みを目指す



▶昨年就任した数内監督。現場の指導とともに、OBの協力体制を強化する役目も担っている

MEMBER

部長/影本 浩  
監督/数内俊和  
コーチ/鈴木久雄  
OBコーチ/小林 誠  
OBコーチ/今西康雄  
OBコーチ/中村達也  
学生トレーナー/半田奈緒子  
学生トレーナー/丸井由貴

学生トレーナー/小浦彩子  
マネジャー/桑原万里絵  
マネジャー/木本宏美  
マネジャー/野呂順子  
マネジャー/小林由佳  
マネジャー/櫻井優里  
マネジャー/辻目佑子  
マネジャー/高木美帆

No	Pos	氏名	身長	体重	学年	前所属
1	GK	水口 智	178	74	4	桐朋高
2	DF	千布 勇氣	178	73	3	佐賀西高
3	DF	宮本 雅之	176	69	4	麻布高
4	MF	太田 裕一	173	69	4	岡山高
5	DF	宮城 康暢	183	72	4	岡山白陵高
6	DF	菊月 達也	166	66	4	東邦大東邦高
7	MF	百谷 将佑	171	57	4	東大寺学園高
8	MF	吉田航太郎	171	69	2	弘学館高
9	FW	木野本朋哉	174	66	4	東大寺学園高
10	MF	伊藤 寛貴	170	65	4	竹園高
11	DF	水澤 仁雅	176	75	3	城北高
12	FW	池田 曉彦	171	67	4	麻布高
13	DF	南田 遼太	171	60	2	筑波大駒場高
14	MF	伊藤 慶一	176	68	4	駒場東邦高
15	DF	高木 駿平	184	73	2	筑波大付高
16	DF	村上 達哉	171	63	2	土浦一高
17	MF	大沢 拓巳	165	60	3	長岡浦和高
18	MF	後藤 謙也	168	68	2	県立高
19	DF	斎藤 信	184	76	3	盛岡一高
20	FW	青木 宏	171	63	4	小田原高
21	GK	中野 誠	181	74	3	盛岡一高
22	FW	明石 篤	170	65	4	筑波大駒場高
23	MF	門田 大範	171	62	4	広島学院高
24	DF	杉山 翔一	177	71	4	厚木高
25	DF	船本 洋平	178	71	3	巣鴨高
26	MF	深田 啓介	181	74	2	日比谷高
27	FW	畑中 計政	160	59	4	熊本高
28	MF	高橋 信行	181	71	3	岐阜高
29	DF	中島 悠司	165	61	3	桐蔭学園高
30	FW	高松 敏	168	61	3	巢鴨高
31	GK	藤安 雄治	172	70	2	横浜緑ヶ丘高
32	FW	小園 健太	175	62	3	海城高
33	MF	岩田宗一郎	180	73	2	洛南高
34	MF	南 哲	163	55	3	開成高
35	MF	西 健吾	167	61	3	海城高
36	DF	熱海 修平	168	68	2	筑波大駒場高
37	FW	金山 裕介	172	72	4	麻布高
38	MF	鈴木 亮平	166	59	3	麻布高
39	FW	中川 隆	184	72	3	巣鴨高
40	MF	那須 雄介	169	61	3	城北高
41	MF	望月 進司	170	64	2	Arcadia高
42	DF	江連 豪	175	72	1	開成高
43	DF	大内三千生	175	63	1	麻布高
44	MF	久木田紳吾	178	63	1	熊本高
45	DF	佐藤 裕人	178	74	1	筑波大駒場高
46	DF	実島 崇之	170	64	1	アール高
47	MF	白井 英介	175	65	1	開成高
48	DF	鈴岡 大明	167	65	1	広島大福山高
49	FW	田島 史也	174	67	1	八戸高
50	DF	藤井 丈生	171	71	1	徳山高
51	MF	松谷 康平	170	65	1	浅野高
52	DF	碓 知也	168	67	4	広島大福山高

▲三菱養和でも指導経験がある鈴木コーチ。就任後、着実に順位を上げ、今季も東京都1部昇格を狙う

「Aチームではないでしょうね。関東リーグの力は、こんなものではない。現役時代、2部ではあるが関東リーグを戦い、社会人としてもプレーした数内監督の目は冷静だ。前述したような関東リーグで戦うこ

とを求めるOBの気持ちも分かる。だが、すぐに頂点の話をするのは気が早すぎるといふことも理解している。現役の声として、伊藤主将も「正直、ギャップは感じます。状況が昔と違うので」と言う。その差を埋めようと、数内監督ら昭和40年代卒のOBを中心に昨年2月、「距離ができてしまったOBを戻さない」といけない。何とか時間を埋めたい」とOB会を「バージョンアップ」。現役のバックアップ強化を主目的に、スクールカラーである淡青ライトラブルーの頭文字を取った「LB会」を有限責任中間法人化した。選手、スタッフ、OBが一体となり、栄光を目指して戦っている。

帝京大との練習試合は、そは降る雨の中で行なわれていた。「僕らの頃は、石ころが転がっているようなグラウンドでした。雨に濡れながら、数内監督はそう回顧する。現在はサッカー部専用ではなくなったが、本郷キャンパス内の御殿下グラウンドは数年前に人工芝化され、照明も煌々と輝く。だが赤門をくぐって三四郎池の隣、安田講堂が見守る中での選手たちの姿は、今も昔も変わらないはずだ。

成長へのひたむきさ  
現在50人を超える部員の情熱に一番感じ入っているのは外部から招かれた目だろ。鈴木コーチはユースの名門・三菱養和S Cで長年指導に当たり、浦和レッズの前

身である三菱重工でもコーチを務めた。「大変な思いをして入学して、僕なら(体育会で)やりませんがね(笑)」と冗談めかすが、「彼らには頭が下がります」と賞賛する。練習は土日も含めて週5回。授業での実験など時間を取られることもあるが、「遅れることはあっても、絶対に休まない。サッカーに取り組む姿勢には感心します」と情熱を感じ取っている。

OBコーチの存在も、その表れだろう。大学院へ進む部員のほかに、留年して指導に当たる部員が毎年数名いるという。小林コーチもその一人。「部活に専念したかった。この間も就職試験で『学生時代に何をしていたの?』と聞かれて、『サッカーはしていませんでした』としか答えられませんでした」と苦笑いする。今季3人の学生コーチは、部員を二に分けたBチームを担当して、鈴木コーチをサポートする。

現在の鈴木コーチによる指導体制になったのは4年前。3部リーグを戦うことになったシーズンだった。鈴木コーチの目には「基礎が全くできていない」と三菱養和などとの差は明らかだったが、「ボール

同じ目的を持ったメンバーが集まっている」と入部の動機を語った。他の強豪校のように、多くの新入生が入るわけではない。だが、司法試験の準備のためにやむなく退部するなど特別な場合を除き、途中で退部する部員はいないという。「4年生と1年生はまだ(意識の)ギャップがありますが、学年が上がるにつれて、引つ張っていきけるようになりまし」と胸を張る。

今年入学してきた久木田紳吾選手は中学時代、熊本県トレンセンに選出。トレンセンの仲間のように、サッカー強豪校へ進む道もあった。選んだのは進学校だったが、「受験の時期から後悔していました。サッカーすればよかった、って」。だが、そこから気持ちを切り替えて、現役で東大に合格。「常に上を目指したい。真剣にサッカーをやりたいかった」と、迷わずア式蹴球部を選んだ。

昨年から監督を務める数内俊和監督は、69(昭和44)年度の卒業生。「僕らの頃は、ヘタだから体を張ってました。そのひたむきさは変わらないです」と、後輩たちを見て目を細める。取材に訪れた日には、帝京大との練習試合が行なわれていた。ボールを支配するとははいかないが、必死に走ること、球際の必死さは目を引いた。相手は一軍ではないようだったが、関東2部の学校相手に、2-2と引き分けた。

「Aチームではないでしょうね。関東リーグの力は、こんなものではない。現役時代、2部ではあるが関東リーグを戦い、社会人としてもプレーした数内監督の目は冷静だ。前述したような関東リーグで戦うこ

とを求めると、蹴るということを重点的にやっています。選手たちは真面目で、うまくはないけれど一生懸命なので、指導しやすいですね。その指導の結果、1年で2部へと復帰。その後も着実に順位を上げ、昨季は1部との自動入れ替え圏内となる2位にあと勝ち点1差まで迫った。

鈴木コーチは「強い気持ちだけでは勝てません」と言うが、それが根底になければ成長はないのも事実。小林コーチは「入学した時点で差があるし、個人の能力では勝てない」と他校との差を認めた上で、「いかにチームの力で戦うか、気持ちで補うか」というのが僕たちのスタイルです」と語る。

帝京大との練習試合は、そは降る雨の中で行なわれていた。「僕らの頃は、石ころが転がっているようなグラウンドでした。雨に濡れながら、数内監督はそう回顧する。現在はサッカー部専用ではなくなったが、本郷キャンパス内の御殿下グラウンドは数年前に人工芝化され、照明も煌々と輝く。だが赤門をくぐって三四郎池の隣、安田講堂が見守る中での選手たちの姿は、今も昔も変わらないはずだ。

とを求めると、蹴るということを重点的にやっています。選手たちは真面目で、うまくはないけれど一生懸命なので、指導しやすいですね。その指導の結果、1年で2部へと復帰。その後も着実に順位を上げ、昨季は1部との自動入れ替え圏内となる2位にあと勝ち点1差まで迫った。